



それはBig Bearの史上最も寒い冬だった。1994年の“地獄の冬”と俺たちは呼んでいる。もうこのまま降り止まないのではないかと思うほど雪は6週間半にもわたり降りつづけた。街は50フィートも埋もれているのに、もちろん学校へは行かなきゃならない。

Ryanと俺(Rich)は12歳の頃からつるんでいて、よく一緒に歩いて学校に通っていた。バスに乗ってもいけるのだが、ドライバーは95歳のじいさんで、とても安全だとは思えなかった。そして俺らは途中でウィスキーボトルをすり体を温め、木の上の秘密基地に立ち寄るのが大好きだった。ある日、僕らはいつものようにリフを口ずさみながら、バンドを作ろうと考えた。でもそれにはギタリスト、ドラマーとカッコいい名前が必要だった。俺は“Applesauseはどう？”と提案したが、“冗談じゃねー！”とRyanは気に入らなかったようだ。

ある日学校へ向かう道の途中、助けを求める叫び声が聞こえてきた。それは電機工学の3回生のDonaldだった。彼は街で一番大きな木の上で(正確には10,678フィート)動きが取れなくなってしまっていた。俺たちは奴を助けたいが回りには落ちた電線だけだ。“そのlineをこっちに投げろ！、投げろ！”奴は叫んだ。その時俺たちは目を見合わせて言った。“それだ！The Lineだ！なんてイカした名前だ！”“いーんじゃねーの？”“よし、決まりだ！”すぐ奴にその電線を投げて死の淵からは救うことはできた。しかし不幸なことにDonaldは感電してしまいそのショックで奴の片目はおかしくなってしまった。俺たちはなんだか申し訳なく、彼にギターは弾けるか聞いてみた。奴は“ああ”と言い、Donaldはその場でメンバーに決定となった。

俺(Rich)とRyan Immigrate、Donald Hormelと俺たちのバンド、The Lineはドラマーが必要だった。そしてMike Thompsonを迎えることになる。これはまた長い話になるってことで・・・

1996年:The Lineはアメリカとカナダのクラブでショーを続ける傍ら、18ヶ月にわたるアルバム プロモーションのため、Sublime、Gutter mouth and Less Than Jakeなどビッグ ネームと共にツアーを回る。

1997年:The Lineはスタジオに戻り(ハリウッド・West beach Recorders) 彼らのセカンドアルバム『AURICLE』をレコーディング。パンク・ロックのルーツを兼ね備えながら、彼らの音楽はより成熟したものとなり、テクニカル・マスロックとハートフル・ロックの融合を試みたのである。『AURICLE』をリリースするとすぐに彼らは初めてのヨーロッパツアーをMillen ColinとState Sonic Surfersらと共に始めた。

2000年1月:The Lineはこれまでの代表作とも言える、3枚目のアルバム『DISMILAR』をリリースする。13曲もの青少年反体制 賛歌を自作するほどまでち密な制作を拡大し、『DISMILAR』を通して個人的信念を叫びまくることで今日のバンドの成功を手に入れた。

2001年:The Lineはこれまでの取り組みに音楽に対する新しいアプローチが加わった、集大成と言ってもいい4枚目のLP 『MONSTERS WE BREED』をリリース。このLPはCMJカレッジ・チャートで初登場174位を記録した。昨年ほとんどをツアーで過ごし、以来大成功に終わったWarped Tour 99-2001やEpitaphレコーディングのアーティスト DEVIATES と回った2001、2002年アメリカ・カナダツアーなどを含め今日もノンストップ・ツアーは続く。

SLUGマガジンはこう評した。“The Lineはライブをみなきゃ駄目だ。もし手の込んだプログレッションとアレンジメントの複雑な曲を作ることに使命感を持っているパンクバンドがいるとするなら、それはThe Lineだ！”